

1/3 ルカの福音書 2 章 41-52 節 「父の家にいる喜び」

小池 宏明 牧師

今日は、12歳のイエス様の姿に注目する。

*宮の中心で律法の教師たちと対話するイエス様

当時、ユダヤ人の成人男子は、ユダヤ三大祭り（過越、五旬節、仮庵）に参加することが律法で命じられていた。ヨセフもマリアも、毎年、春先の過越の祭りはエルサレムに上っていたようだ。イエス様も他の兄弟たちも、父母に連れられて、毎年、エルサレムに行っていたと思われる。特にイエス様が12歳の時、印象深い出来事があった。エルサレム巡礼の帰り道で、両親はイエス様がないことに気付いた。イエス様は、どこに行ってしまったのだろうか？

ヨセフとマリアが、行方不明のイエス様を、三日も捜し回り、ようやく見つける。イエス様は、ヨセフとマリアにとって、全く想定外の場所、すなわち神殿の中で、教師たちの真ん中に座っていたのだ。イエス様は、そこで、話を聞いたり、質問したりしておられた。イエスの周りを囲んでいた教師たちは、イエス様の知恵と答えに驚いた。

*父の家にいるイエス様

49節「すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

これは、福音書の中で、最初に出て来る、主イエス様の発言である。人として生まれて下さったイエス様が、まことの神であると言うことをご自分の口で初めて宣言されたのだ。この箇所を直訳すると、主イエス様は、「わたしの父と共にいるのは当然だ」、あるいは「父の仕事に就いているのは当たり前だ」となる。

ヨセフとマリアは、イエス様がどこにいるのか捜し回り、イエス様がいる場所に関心をもったが、主イエス様の方は、どこにいても、父と共に、父の働きをすることができる、と答えているのだ。ここで言う、自分の父とは、ヨセフのことではなく、父なる神様のことである。これは、イエス様と父なる神様との特別な関係を示している。

ヨハネの福音書1章11-13節によれば、私たちも、神の御子であるイエス様を信じて受け入れたならば、神の子どもとなる特権が与えられている。私たちは、人間的な能力や努力ではなくて、神によって生まれた神の子どもとなるのだ。

主イエス様は、父なる神様と深い交わりを持っていたように、私たちも同じ交わりを持つことができる。私たちも主と共に生き、主の働きに加わり、主にある喜びを体験しながら生きる生涯でありたい。